

## 前置詞“out”再考(2)

浅川 照夫

### 1. はじめに

前置詞句 [out NP] の NP には「出入口や開口部」を表わすものでなければならないという一見極めて特殊な制約がある。前稿では、この制約は実は英語の経路前置詞群の意味特徴を受け継いでいるものであり、その点において、英語の文法体系に忠実に従っている自然な制約であるということを論じた。前置詞 out は基点から着点までの経路を表わす前置詞と考えられるので、経路前置詞全般の用法の中に位置づけなければ、その本質を見失う恐れがある。前稿において、経路前置詞の一般的な意味の特徴を記述し、中でも、前置詞 up/down の特徴を更に詳細に考察し、次の結論を得た。

Properties of Path-Prepositional Phrase [P+NP]:

[A] The trajectory Path is contained within the Landmark NP.

[B] The preposition expresses a directed line of motion with respect to the Landmark.

[C] The way the trajectory Path goes depends on geometric description of the Landmark.

[C-1] *P=up/down*: When the Landmark is schematized as a 2D planar surface, the trajectory Path requires contact with and/or support by the outer surface of the Landmark.

[C-2] *P=up/down*: When the Landmark is schematized as a 3D cylinder, the trajectory Path goes via the inner space of the Landmark.

[D] The Landmark functions as Passage.

特徴 [A] から [D] は経路前置詞全般に当てはまる一般的なもので、個々の前置詞によって更に厳密に意味指定がなされるものである。[C-1] と [C-2] は前置詞 up/down に固有の特徴で、その趣旨は、ランドマークである前置詞の目的語が二次元平面の形状をしているか、または三次元立体の形状をしているかによって、トラジェクターの移動経路のあり様が影響されるというものである。前稿では、out が前置詞として用いられる際に、英文法のどこにもない全く新しいタイプの前置詞として登場したのではなく、経路前置詞 up/down と同じ前置詞範疇に組み込まれていったと仮定した。そうすることによって、上記制約も含めて、これまで指摘されることのなかった前置詞 out の用例に自然な説明を与えることが可能になった。

(i) [C-1] の条件により、前置詞 out は John drove out the dark road to his house のように二次元平面の目的語を取ることができる。目的語の形状は up/down と同じく細長いものに限定され、トラジェクターはその細長い平面上を表面に接触しながら進み、その外に出る。

(ii) [C2] の条件により、前置詞 *out* は *It draws warm air from the room and sends it out the chimney* のように三次元立体の目的語を取ることができる。目的語の形状は *up/down* の場合と同じ筒状であり、トラジェクターはその内部空間を出口に向かって進み、やがて外に出る。

(iii) 多くの文献で指摘されてきた *John went out the door/ Mary looked out the window* のように出入り口を目的語とする文は、もともと二次元開口部としての出入り口が三次元筒状の形状へと概念化し直され、その結果、[C2] の条件により生成される。

現在、前置詞用法の *out* はアメリカ英語では普通に見られるけれども、イギリス英語では一部の方言を除いて廃れてしまっている。歴史的にみると、この表現がアメリカ英語に頻繁に登場するようになったのは19世紀半ばからで、比較的新しい表現形式であると言える。<sup>(1)</sup> 現在でも当時の新聞、雑誌、小説類などの言語資料を広く調査することができ、また社会情勢の変化まで写真等の記録を通して生き生きと再現できる時間的範囲内にあるので、この表現が使用されるに至った経緯を辿ることは、左程難しいことではなかろう。19世紀はアメリカに大量に移民が流れ込んだ時代であり、彼らの言語が影響しているかもしれないし、マスメディアの発達がこの種の簡略表現に拍車をかけたのかもしれない。言語変化を社会情勢の変化から探ることは、大変興味ある問題である。

しかし、どのような外的要因があるにせよ、特定の表現が「文法内」に確立されるためには、必ず文法内での内的要因が働いていると考えなければならない。言語変化は文法体系の変化であり、次世代へと連続的に継承されていって初めて、変化としての資格を得ることができる。したがって、世代間の文法を繋いでいる子供の言語習得プロセスの中に、言語変化を促すような原理原則が働いているはずである。前稿の主張は、*out* が他の文法形式を基盤にして前置詞用法を確立していったという点で、言語習得の時間軸を説明原理の中に取り入れた動的文法理論が提唱する「モデル依存の拡張」として理論的に捉えなおすことができる。その意味で、本稿では、まず動的文法理論の立場から提案された鈴木(1985)を批判的に検討することから始め、前置詞 *out* に関する残された幾つかの言語事実について説明を続けていきたい。

## 2. 動的拡張論

鈴木(1985)は、なぜ *out* の目的語が出入り口や通路でなければならないかという問いに一つの「説明」を与えようとした初めての試みであると言ってよいだろう。鈴木は、子供の言語習得における中間段階の文法に目を向け、その段階で存在するある種の不調和が文法の発達に伴って解消されていくときに、出入り口の制約が自ずと導き出されると主張する。では、どの段階の文法にどの種の不調和が潜んでいるのだろうか。鈴木の説明は三つの仮説から成立する。

よく知られているように、英語では *John walked along (the street)* , *John ran up (the hill)* , *John went down (the road)* のように、同じ語彙が副詞的不変化詞 (Particle) と前置詞 (P) の両方の機能をあわせ持っている。そこで鈴木は、子供が不変化詞と前置詞の同類関係を習得する段階に達したとき、*out* だけが前置

詞としての機能を持たない中間文法 G (i) が存在すると仮定する。

仮定1：中間段階の文法 G (i) において、前置詞としての out はまだ習得されていない。

ここに「ギャップの原則」が生まれる。すなわち、副詞的不変化詞と前置詞の体系を見たとき、out の前置詞スロットのみが体系的空白 (systematic gap) を作るのである。「ギャップの原則」は文法が次の段階へ発達するとき、この空白を埋めようとする。

仮定2：次の体系的空白 (-) は、「ギャップの原則」により満たされる方が好ましい。

	along	by	down	on	up	---	out
Particle:	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
Preposition:	OK	OK	OK	OK	OK	OK	(-)

しかし、「ギャップの原則」だけで単純に空白が満たされるとすると、out がどのような名詞句とでも共起できるわけで、出入り口の制約の説明にはならない。そこで、さらにもう一つ、拡張に働く力を仮定する必要が生じる。

鈴木は、言語習得途上にある子供の物事の認識の仕方について次のように考える。子供は、大人の場合と違って、経験がごく身近な状況に限られているので、John went/looked out の文を耳にした時、直接観察できる出来事や人物、物に意識を集中させる。そうだとするならば、「John が出てくる前は家または部屋の中においてそこから出て来る (out of the house) という捉え方をするのではなく、まさに発話の瞬間に直接的な刺激から容易に見て取れる情報に基づき、ドアならドアのような出入口を John が通過中で、かつ外に向かっている、という状況の捉え方 (out of the door) をする」のである。つまり、言語を習得中の子供にとって、John went/looked out のような文の背後には、表面には現れていないものの DOOR/WINDOW の意味が潜在的に隠されているという主張をしていることになる。統語形式が完全な意味を表示していないので、ここに意味と形式の不調和が生じている。このような場合、鈴木は次の段階の文法で、隠れた意味を顕在化させることによってこの不調和を解消しようという力が働くと仮定する。

仮定3：顕在化の原則

中間段階の文法 G (i) において、統語形式 F がその形式から複合されない潜在的意味 M を含意する場合、次の段階の文法 G (i+1) において、意味 M が既存の統語形式を借りて、F の一部に形式的に顕現させられる。

鈴木は以上の三つの仮説を基にして、出入り口の制約を文法の拡張原理による当然の帰結として説明しようとする。すなわち、副詞的不変化詞 out を含む基体に対し、「ギャップの原則」によって外側から

拡張の力が加わり、さらに「顕在化の原則」によって内側からも拡張の力が加わる。「ギャップの原則」はPとしてのoutを動機付け、「顕在化の原則」はoutの目的語がドアや窓に限定される出入り口の名詞句に限られることを動機付けるので、なぜ前置詞outが存在し、しかも目的語が出入り口を表わす名詞に限定されるのかを正しく捉えることができるというものである。以上の主張をまとめると次のようになる。

G (i) : John came [out]. / John looked [out].

↓ [ギャップの原則] & [顕在化の原則]

G (i+1) : John came [out the door]. / John looked [out the window].

このように新しく文法に組み込まれた名詞句が、典型的な出入り口を指す door, window から同じ出入り口の gate, exit, back door 等へと語彙の範囲を拡げ、さらに入入り口と意味が関連する通路の名詞句へと拡大すると考えれば、西川 (1949) や尾上 (1953, 1957)、鳥居 (1959) の挙げていた用例に一応の説明を与えることができる。

動的文法理論の枠を用いた鈴木案は三つの仮定から成り立っており、三つの仮定が正しい限りにおいて、鈴木案はある程度の妥当性を持つと言えよう。仮定1は、新しい言語事実が文法に導入される前段階を仮定しているので、時間軸に沿った文法の発達を考慮すれば、必ず通過するはずの中間段階であって、これを否定することはできない。仮定2については、既に動的文法理論研究において重要な原則として定着しているもので、他の言語事実の説明からも十分に動機づけられた原則と言ってよい。仮定3に関しても、pretty構文や同属目的語構文などで原則としての根拠は十分に立証されてきたものである。三つの仮定はそれぞれに独立して根拠付けられるもので、それ自体を反証することは現段階では難しいかもしれない。

しかし、鈴木案をそのまま受け入れるには抵抗感がある。それがどこにあるかと言えば、仮定3の「顕在化の原則」において決定的に重要な働きをしている out の潜在的意味に関する前提条件にある。鈴木は子供がこのような文に接したとき、DOOR や WINDOW の意味が背後に隠れていると仮定した。これは一見何の変哲もない仮説のように見えるが、子供または人間全般の認識構造の視点から見ると、それほど単純な問題ではない。

認知意味論においては、言語表現の意味とそれが表わす概念を「思考する人間の本性と経験 (the nature and experience of the organisms doing the thinking)」に基づいて定義する (Lakoff 1987)。つまり、人間が人間であるための身体をもっているという視点を取り入れて、人間の生物学的能力や身体的、社会的経験等の「身体化 (embodiment)」に基づいて意味の問題を考えるのである。例えば、我々の身体が二本の手、二本の足、顔の前面に置かれている目といった特性を持つからこそ、「前後」「左右」「走る」「歩く」という概念が有意味になるといった具合である。

我々は概念構造を習得する前に、様々な出来事、事物を身体的に経験する。そして、これらの身体経験には物の形や種類、色といった人間が作り上げるカテゴリー化に関するものと、物と物との関係を表わす位置的な概念に関するものが含まれる。後者は通常、前置詞によって表現される空間的な位置関係を含む。これは「運動感覚的イメージ・スキーマ」で構造化され、人間が日常生活の中で繰り返し経験することから生じる単純で基本的な認識構造であるとされている。運動感覚的イメージ・スキーマには「容器のスキーマ」、「経路のスキーマ」、「部分・全体のスキーマ」等が検討されているが、ここで問題にしたいのは out (of) の意味と密接に関わる「容器のスキーマ」である。

「容器のスキーマ」は「内部」と「外部」、及びその両者を隔てる「境界」の三要素から成り、物体が容器の内にあるか、外にあるかを区別する最も基本的な認知構造である。例えば、The ball is in the box という状態を経験する場合、箱という容器は内部と外部を区別する境界であり、我々は比較的単純に「ある物体がある容器の中にある」というように抽象的に構造化して理解する。これを「静的な容器のスキーマ」とすれば、次のような動きを表す事例の基本構造は「動的な容器のスキーマ」と呼ぶことができる。我々が普段の生活の中で常に経験している、容器への物の出し入れのことである。

(1) I put the ball in the box. //I will give you that idea. //It's difficult to put my idea into words. //Try to pack more thought into fewer words. //His words carry little thing. (Lakoff and Johnson 1980)

この「動的な容器のスキーマ」が今、我々の問題としている John went/looked out の例にも現れている。この文の根底にある out のイメージ・スキーマを表示してみると、次のようになる。



図1

トラジェクターである John (あるいは John の眼差し) は最初、四角形で示してあるランドマークとしての容器内部にいる。時間の経過とともに、トラジェクターはランドマークの境界を超え、実線で示した経路を描いて、その空間の外側位置に移動する。日常繰り返される経験からある種のイメージ・スキーマを構造化する能力は人間に生得的に備わっている能力である。認知言語学ではイメージ・スキーマを言語習得能力と関連付けることをしないが、我々の概念化や言語表現化の相当数が「容器のスキーマ」またはそれに基づくメタファーから引き起こされているので、「容器のスキーマ」は、子供の言語習得に先立って、認知構造発達の比較的初期の段階で既に形成されていると考えられる。

さて、John went/looked out が「動的な容器のスキーマ」に照らして有意味であるとした場合、人物あるいは視線が容器の中から外へ出てくることになる。この場合、家や部屋から出て来るのが極めて自然な見方であって、その一部分である DOOR や WINDOW といった出入り口から出てくるというイメージはあまりに細部にこだわりすぎて、一言語・文化を超えて普遍的な性格を持つイメージ・スキーマの認

知構造に抵触するのではあるまいか。確かに、直接的な視覚経験からは物の出し入れに出入り口が関与するのは明々白々であるが、認知のあり方という側面、特に発達途上の子供の認知能力からは、ドアや窓、蓋などの個別的な下位レベルのカテゴリーより「何かの入れ物」という漠然としたカテゴリーの方が優位であって、そのことは「容器のスキーマ」の一般性によって裏付けられると考えられる。いずれにせよ、子供が容器のどの部分を意識するかという問題については、綿密な実験を繰り返さなければ確実な結論は得られないであろう。

言語事実の面から、DOORやWINDOWの隠れた意味があるかどうかを探ることもできる。基本的なスキーマの全体図を変えずに、トラジェクター、ランドマーク、経路に僅かな変更を加えたスキーマを「精密化 (elaborations)」という。Lindner (1982) は「精密化」によって示される様々なスキーマ表示によって、outの詳細な意味、用法を検討しているが、それらの事例の中に入入り口概念は全く現れてこない。例えば、次の精密化の諸例を考えてみてもよい。

(2) a. The cat was in the box and jumped out. //b. Pluck the feather out. //c. The dog dug the bone out. //d.

He picked out two pieces of candy (from the dish)

(a)では境界が完全に閉じていないランドマークの隙間からトラジェクターが飛び出す。(b)ではトラジェクターがその一部が付着しているランドマークから離される。(c)では無限の広がりをもつランドマークつまり地面の局所のみを境界とみなしている。(d)は部分と全体の関係を表し、トラジェクターがランドマークの集合メンバーの一部になっている。これらに共通しているのは、初期状態においてトラジェクターが何らかの形でランドマークの空間内部と繋がっていること、そして最終状態においてトラジェクターがランドマークから切り離されていることである。outの意味の基本は、「容器のスキーマ」に示されるとおり、この初期状態と最終状態の対比にあるのであって、内部と外部の境界にある「出入り口」は重要な意味を持たない。むしろ、(1)のような例では出入り口は見えていなくてもよいのである。

もし子供の認知能力にとって John went/looked outにDOORやWINDOWの意味が隠されているとするならば、大人の認知能力にとっても高い確率で同じ傾向が見られるはずである。が、事実は必ずしもそうとばかりは言えない。例えば、次の文のrush outでは、文脈から判断して、確かにドアから出たという含意が濃厚に残っている。

(3) The door at the bottom was closed but unlocked. We flung it open and rushed out.

(4) There was a violent sneeze in the passage. They rushed out, and as they did so the kitchen door slammed.

しかし、次のrush outになると、出入り口を含蓄する必要は全くなく、家から出たという解釈で充分である。

(5) We boys were congregated within the large, oval sugar house. Suddenly screams were heard from without and we all rushed out to see what was the matter.

(6) A more delighted man than Zebbie I never saw when we finally drove up to his low, comfortable cabin.

Smoke was slowly rising from the chimney, and Gavotte, the man in charge, rushed out and the hounds set



up a joyful barking.

さらに、外に出て来る物によっては、出て来る場所が決して出入り口ではない場合がある。例えば、The worms came outやThe sun came outにおいて、ミミズが出て来るのは普通、地面からであって出入り口と言えるものはなく、太陽も同じで、海の水平線か山の尾根、ビルの谷間から昇るのである。このような視覚経験は子供とて大人と同じように、いや大人以上に驚きや喜びを持って体験するのであるから、経験的基盤からすればDOORやWINDOWではなく次のような名詞句が顕在化してもいいはずである。

(7) \*The worms came out [the ground, the rotten leaves, the hole]. // \*The sun came out [the horizon, the mountain, the building]

しかし、このような顕在化はない。従って、含意された意味のうち、顕在化されるべき意味と顕在化されてはならない意味をどう区別するのが問題になる。言い換えれば、出入り口だけが顕在化されるにあたっては何か特別な理由があるのかということになり、そもその出発点である「なぜ出入り口か」の問題に舞い戻ってしまう。

鈴木案に対するもう一つの抵抗感は、「ギャップの原則」にoutの前置詞部分を適用したことにある。副詞的に使われる不変化詞にはabove, about, across, ahead, along, around, aside, away, back, before, behind, below, by, down, forward, in, near, off, on, out, over, past, through, under, upがあるが、この中で前置詞として使われないものにahead, aside, away, back, forwardがある。「ギャップの原則」をどこまで拡大適用するかは明確にされていないが、outに関する体系的空白の仮定が正しいとすれば、上に挙げたahead等の不変化詞の前置詞部分が習得のある段階で体系的空白を生み出していると仮定して何ら差し障りはない訳である。しかし、大人の文法に至るまで、これらの前置詞用法は確立しない。仮にこれらの不変化詞にはoutと違って顕在化されるべき意味が隠れていないと反論するならば、その根拠を示す必要がある。

以上、動的文法理論の三つの原則を応用した鈴木案は説明力があるように見えるが、原則そのものの根拠は否定しないものの、原則の発動を促す言語事実の分析に非常に無理が見られることを指摘した。この案には更に、子供の言語習得の途上においてJohn went/looked outの背後にDOORやWINDOWが隠れているということをどのように確認するかというデータ立証の困難さも付きまとう。大人の言語分析を通して子供の習得プロセスに一つの仮説を投げかけることは、それ自体、有意義なことであるけれども、その際、どんな類の仮説を立ててもよいのではなく、仮説の確からしさということを考慮する必要がある。

### 3. 前置詞用法の導入プロセス

#### 3.1 副詞的用法

outに関するデータをもう少し詳しく吟味してみよう。まず、outが前置詞として用いられる以前の段階G(i)が存在するという仮定はいずれにせよ必要である。言語発達にせよ通時的な研究にせよ、時間的な変化を考慮した理論では、なぜその構造が生まれるに至ったかが問題なので、この種の段階は否定

することができない。そこで、[out NP]が出現する前のG (i) 段階でどの種のout データがあるか検討しなければならない。

Outの用法には、前置詞用法が導入される以前は、最も基本的な副詞用法しかない。整理してみると、まず、単独で現れる不変化詞の用法以外に、副詞句または前置詞句を従える次のような例がある。

- (1) a. There are too things happening out there that can blow your position out of the water. (WSJ7-101)  
 //b. He met her out in Chicago. //c. While major social and historical forces are tearing the country apart, 12-tear-old Kevin Arnold (Fred Savage) is playing touch football out in the streets. (WSJ8-118) //d. Louis and I lived farther out in the wilderness than most people, for in this country only the coast is used. (S. Carleton, *The Tall Man*) //e. I saw him last night out on the edge of town. (Huddleston and Pullum 1999:645)

この種のoutは副詞句や前置詞句に伴って「(自分のいる場所から)離れた場所で」を意味する。例えば、(b)はアメリカ英語に特有の言い回しで「西の方のシカゴで」を意味し、(d)は「はるかに離れた荒地に」、(e)は「町外れの離れた所で」の意味である。

これは「静的な容器のイメージ・スキーマ」で次のように図式化でき、容器の内側から容器の外側にある点を見ていることになる。

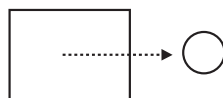


図2

四角形は話者の近辺、点線は外へ向かう認識の方向転換を示し、外側の白丸は(a)ではthereになり、(b)ではin Chicagoになる。

前置詞句を取る場合で最も普通なのがof前置詞で、次の二通りがある。

- (2) a. John came out of the room. // b. John came out of the door.

この二つは意味が似ているようで全く異なるので、明確に区別する必要がある。部屋を目的語とする(a)は、容器の中から外に出ていく「動的な容器のスキーマ」で示すことができる。次の図3で言えば、四角形は部屋、黒丸がトラジェクターとしてのJohn、実線はJohnの移動経路を示す。

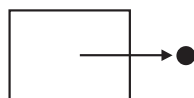


図3

一方、ドアを目的語に取る (b) は、同じ「動的な容器のスキーマ」で表すことができても軌道経路とランドマークとの関係が図3のスキーマとは異なる。Johnはドアの中から出て行くのではなくて、ドアを



通路としてそこを潜り抜けて外へ出るのである。図式化すれば図4のように表せる。四角形は通路としてのドアを表している。

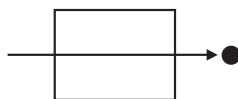


図4

前稿2節で見たように、図4の通路のイメージ・スキーマを持つものは of 前置詞句に限らず、その他、at, by, through の前置詞句で表される例がある。以下の例においても、前置詞句は出入り口を通り抜けて外に出るという意味であることに注意しておきたい。

(3) She made me no answer, but flew down stairs, out at the front door, and down the avenue as quick as an arrow. (Francis Sheridan, *Memoirs of Miss Sidney Bidulph*)

(4) He went out by the side door and I didn't see him again. (LOB P26 52)

(5) The bandits had gone out through the revolving door, climbed back into their limousine and disappeared without a trace. (*New York Magazine*, Apr. 30, 1973, p.40)

以上、副詞的用法の out の例を挙げたが、その形式と意味をまとめてみると次のようになる。形式は同じであるが、意味は三種類に分かれている。

(6) Form: [out + PP]

Meaning: (a) M1: John lived [out [in Chicago]].

(b) M2: John came [out [of the room]].

(c) M3: John came [out [of the door]].

(d) M3: John came [out [at/by/through the door]].

以下では、M1を「在外のout」、M2を「外出のout」、M3を「通過のout」と呼んで区別する。

outの副詞用法は上がすべてではない。伝統文法において「副詞的対格 (Adverbial Accusative)」と呼ばれた、名詞句が副詞的に使われている次のような用例が観察されている。

(7) Out West, it was the time of the red sun and the dust storms. (A. Miller: *Before Air Conditioning*) //--- gross and mediocre people who had made a great deal of money in the manufacture of patent medicines out West. (Dreiser, *Free*)

(8) Out Indiana way we wouldn't look at a cornfield that size. (Dos Passos, *Three Soldiers*)

(9) Betty McCaw, who lives out Templepatrick way, tells me she was in the electricity showrooms the other day when she happened to catch the eye of another woman in the queue. (BNC)

(10) D'you know what that little girl of mine did last Saturday, when her troop was on a hike out Berkhamstead way? (G. Orwell, 1984)

これらの例の out は静止状態を表し、(7)「遠く西部では」、(8)「(西の) インディアナ州あたりでは」、(10)「(向こうの) バーカムステッド方面で」の意である。下の例のように移動の方角を表わす場合でも可能である。

(11) She wished to see the Dublin mountains, and we went out Rathfarnham way and wandered about the banks of the Dodder river ---. (G. Moore, *Memoirs of My Dead Life*)

(12) “And no one went out that way?” “It was locked,” she said. (C. Willis, *To Say Nothing of the Dog*)

(13) I was trying to get enough money to go out West, but when I saw that Neil didn't want to go out West with me I decided to break away. (F. Desroches, *Behind the bars*)

類例として、既にイディオム化している front, back の例もあげておこう。

(14) I was just deciding if I wanted to go out back and pay my respects to Scout. (G. Zevin, *The Hole We're in*)

(15) “Step out front and take a look. And smell the air.” Mom slid off the stool and hurried out the front door. (E. Bloor, *Tangerine*)

副詞的対格が現れる例には大きな特徴がある。一つは、「外出の out」の用法がないということである。John went out West は John went out in the West であり、John went out of the West ではない。名詞句 the street out front も the street out in the front の意である。前置詞 in を伴う例を参照。

(16) I knew better than to go out in the West without a lot of gas and a container of drinking water. (J. Gieson, *Rapter: A Neil Hamel Mystery*) // Jeff tells Judson he is sick of the East: “I want to be out in the West, where there's room to breathe --- where the blood runs red in one's veins --- where a six-shooter is a man's best friend.” (D. Bordwell, *Narration in the fiction film*)

(17) ... we did not doubt that seeing the light go out in the front, our unseen watcher would proceed to the back. (B. Bush, *Reflections: Life After the White House*) // They came out in the back and I got to shake hands with all the football teams and all the folks that were there supporting them and take my picture with them. (DGC, B, Clinton, 1996)

これには理由がない訳ではない。通常、名詞をそのままの形で場所を表す副詞として用いる場合、place, way, 方角を表す north/south/east/west 等、漠然とした広がりを持つ極めて特定の名詞表現に限られている (ex. John drove west to Osaka // \*John drove Osaka)。「外出の out」は容器の内側から外側に出るという意味なので、そのためには内と外とを明確に区別する境界線を持つモノが存在しなければならない。したがって、輪郭の不鮮明な副詞的対格では「外出」の意味に適合しないのである。もう一つは、明確な境界線がないという事実と関連するが、「在外の out」の意味と微妙に異なるという点である。例えば、Boston にいる母親が My daughter lives out in Chicago と言う場合と She lives out Indiana way と言う場合を比較すると、前者は Boston という都市あるいは Massachusetts 州から外に出て暮らしているというニュアンスを持つのに対し、後者の場合は中心部から遠く離れた辺地にいるという意味合いがある。つまり、前者は不連続体としての外側を指し、後者は連続体の中の周辺部を指しているのである。その意味で、副

詞的対格の意味の場合を「在外のout」と区別して「周縁部のout」と呼ぶことにする。

以上、副詞用法のoutがどのような構造的、意味的環境に生じるかを見てきた。文法拡張の漸次的変化という観点からは、これらの用法にどのような動機付けが隠されていて、どのように [out NP] の発生にかかわるプロセスが促進されていくのか考えなければならない。この観点から上で見たデータをもう一度捉え直してみよう。

副詞的対格がやや特殊な用法であることを考えれば、最も基本的なoutの副詞的用法は、単独で現れる場合を除けば、PP補部を持つ「在外のout」、「外出のout」、「通過のout」の三つの場合であると言ってよいだろう。この段階で既に「在外のout」(The hurricane moved out towards Atlantic Ocean等)と名詞句の副詞的用法(John drove towards the westの意味でのJohn drove west)が確立しているとすれば、統語的かつ意味的な類似性を基に、副詞的対格の「周縁部のout」(The hurricane moved out west)が文法に導入されるのはごく自然なプロセスである。

本稿では、前置詞としてのoutは既に存在している前置詞up/downとの意味的な類似性に基づいて派生されると仮定しているが、そもそもNP目的語を取らない副詞のoutがなぜ目的語を取るようになるのかという問題もあり、この拡張の仕組みについてはもう少し丹念に検討する余地が残されている。したがって、副詞的対格が前置詞outの前の段階で導入されているとすれば、問題となる形式[out NP]が英文法の他の属性を基にして、特別な仮説を設けることなく自然に生成されることは注目してよいだろう。ただし、既に指摘したように、名詞句の副詞的用法は意味的に極めて制限された一部の名詞句にのみ有効であるため、[out NP]のNPは中心部から離れた周縁部を表しているだけで、内と外とを分ける容器や通路を表しているわけではない。したがって、通路を表わすNPが導入されるためには、どうしても前稿で指摘したような新たなモデルの存在が必要となるはずである。

### 3.2 周縁部のOUT

前置詞outの目的語には二次元または三次元の細長い形状の物体が生起するというのが、本稿の主張である。John is out the doorやThe train went out the tunnelに見られるように、これは静止状態か移動運動かにかかわらず当てはまる。この「細長い形状の物体」という条件は、意味の類似する前置詞up/downをモデルに導入されるのであるが、このモデル依存を加勢する力が、実は前節で見た副詞的用法outのみの文法段階で既に備わっている。一つは前置詞of, at, by, throughを伴ってはいるが、「通路のout」が存在すること、もう一つは「周縁部のout」の中に「細長い形状の物体」という用件が暗黙のうちに了解されている可能性があることである。前節において、「周縁部のout」は「在外のout」とは異なることを指摘したが、この違いは、連続体の端にあるか、不連続体で外部にあるかの違いで、図5と図6のように図式化することができよう。

OEDによれば、out Westとは、名詞用法では「アメリカの初期入植地の西側に位置する領域」であり、「アメリカ東部の住民から見ると遠くにある西部地域」へと意味が広がり、「遠くの西部で(へ)」と副詞的にも

使われる、とされている。ここで、「遠くの」というイメージ形成には線的な遠近感が必要である。つまり、図5のように、細長い平面の左端を東部（基準点）として、もう一方の右端を辺境の西部と見立てることができる。out Westは、アメリカの東部を基点として西部へと開拓が進んでいく様子から、入り口としての東部から出口としての西部へと、ある種の通路イメージが形作られ、そのイメージの上に出来上がった表現である。front, backの場合は、前面と背面が一对となって通路イメージの両端を形成するので、直感的にもっと分かりやすい。前面と背面が意味を持つのは、自分の現在位置と合わせて、三点を一直線上に置いたときである。結局、副詞的対格のoutは、細長い空間をイメージし、その空間の一方の端の呼び名を目的語にしていると言うことができる。出口としてのWest, front, backをそのまま目的語にしている点で、非常に興味深い例である。<sup>(2)</sup>

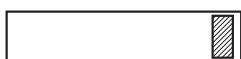


図5

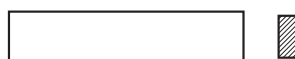


図6

以上のように、既に副詞的用法のみの段階で、outが経路前置詞 up/downと極めて類似した形式、意味を備えていることが分かる。[out NP]のNPが副詞的対格のNPから通常のNPへと拡張するのは自然なプロセスであるし、その場合、NPに特殊な意味的制限がかかるのは、もともとの副詞用法のoutに備わっている通路イメージが経路前置詞 up/downの目的語の意味とピッタリと合致していた結果でもある。

ところで、「周縁部のout」は副詞的対格に限られているが、上のような拡張を主張するならば、当然の予測として、拡張後に副詞的対格以外の通常のNPで、筒状立体の出口を表す語彙が前置詞outの目的語に生起している例が存在してもよいはずである。立体空間で図式化すると、図7のように、通路の全体イメージの中の太線部分が焦点化されている例になる。



図7

次の例では、まさにoutの目的語に通路の末端を表す単語が現れている。あまり自然とは言えないとする母語話者もいるが、本稿の拡張を支持する例として挙げておく。<sup>(3)</sup>

(18) I love the idea of being able to jump out of the bed into the pool, climb out the other side and grab my breakfast. (*JET*, Jan. 29, 1981, p.22)

(19) Curt pops out the other side like a watermelon emerging from the birth canal. (K.L. Going, *Fat Kid Rules the World*)

(20) While the bats do not roost in the part of the tunnel owned by Texas Parks and Wildlife, most of them

choose to exit through this southern port, although as bat numbers increase in the tunnel, many go out the other end and fly over the upper viewing deck to join the ones coming out the south end. (L. Hodge, *Official Guide to Texas Wildlife Management Areas*) //We went through the main tunnel, out the west end and down to the dock area. (B. Waldron et al, *Corregidor*)

(2) At 3:07 PM a CSX Transportation train derailed in the tunnel and subsequently sparked a serious fire that sent black smoke out both ends of the tunnel and out manholes along nearby streets. (B. Smith et al, *Insurmountable Risks*)

(22) As soon as Teddy came in through the door on the west side of the lot, Ryan, unseen, went out the east side to get a better look at Teddy’s pursuers. (D.C. Moore, *The Atlanteans*)

#### 4. 前置詞 at/by 省略規則

さて、outの副詞的用法のみの段階の文法からいかにして前置詞としてのoutが導入されるかについては、本稿の提案も含め、様々な案が考えられるであろう。中でも前置詞省略規則は最も単純な規則として思い浮かぶが、前置詞 of, through の省略については、前項において不十分であることを論証した。本節ではもう一つの前置詞省略規則である前置詞 at/by の省略可能性について検討する。

この二つの前置詞は目的語に door と window に類した名詞のみを従えるので、一見したところ、前置詞 out の出入り口の制約にうまく合致しているように見える。事実、鳥居 (1959) は of ではなく at 省略を主張しているほどである。<sup>(4)</sup>

(1) He used to go out at/by the back door. //She came in at/by the window.

(2) \*He used to go out at/by the barn. // \*She came in at/by the roof.

しかし、以下に述べる二つの点で、この省略も不適格と言わざるを得ない。まず、データの面から。これまで挙げてきた例から、[out NP] が物理的な運動と視線の移動とを区別しないで、どちらにも用いられることが分かっている (ex. John went/looked out the window)。しかし、[out at/by NP] の場合は、以下の例に示されるように、視線の移動では用いることができないのである。

(3) a. He went out at/by the door. //b. He went out the door.

(4) a. ?\*He looked out at/by the window. //b. He looked out the window.

(4a) は at/by を場所の前置詞と採って、He looked out, sitting at/near the window と解釈すれば正しい文であるが、(4b) とように「窓から外を眺めた」の意味にはならない。

さらに、[out NP] が tunnel, nose など通路を表す名詞を許すのに対して、at/by はこのような名詞を許さない。

(5) Blow the air out the nose. // \*Blow the air out at/by the nose.

(6) We saw a few cars coming out the tunnel. // \*We saw a few cars coming out at/by the tunnel.

次に、at/by の意味の面から。Estling (1999) は [out of NP] と [out NP] を対比して、前置詞を用いるのは、

開口部そのものを強調したり、他の開口部の可能性と峻別する必要がある場合であるとしている。同様のことがat/byにも当てはまり、すなわち、この構文においては、これら前置詞は特有の意味を担っていると言えるのである。そうであれば、有意味な要素を省略するという文法規則は避けなければならない。では、前置詞at/byがどういう意味を持っているか。この問題に適切な説明を与えることはなかなか難しいが、以下、この二つの前置詞の微妙な意味の違いを探ってみる。

まず前置詞byであるが、これが通過のbyなのか、手段のbyなのか判然としない。Lindstromberg (1998:147)は例文Ann came in by the side doorを挙げ、前置詞byを“Using X as a route”の意味だとしている。これはLongman Advanced American Dictionaryのbyの項にある定義“passing through or along a particular place: It's quicker to go by the freeway. Doris came in by the back door.”と一致する。このthroughの意味のbyをMacmillan English Dictionary (2<sup>nd</sup> edition) や小学館プログレッシブ英和辞典は「手段」を表すbyの項に並べている (ex. We returned home by a different route. //She went in by the side entrance. //He came by the freeway.)。このbyはHe passed by the churchに現れる「近くを通過する」意味のbyとは明らかに異なるので、手段の分類は一理あると思われる。米語母語話者にJohn came in through the window と John came in by the window の二つの文の意味の違いを調べた結果を紹介すると、throughは誰もが認める正しい文で、運動している様子が強く主張されていると感じられるのに対して、byはそれほど自然な文ではなく、中には非文法的であるとする話者もいたが、概して、窓にロープをかけて上ったとか、丈夫そうな窓枠に足をかけてよじ上ったとか、主語行為者が経路の手段となる実体と積極的に関わりを持つような解釈が好まれていた。明確な結論を出すことはできないが、本稿では、このbyを「手段」の意味と採っておきたい。

前置詞atには、周知のように、物の機能と結びついて解釈される用法がある。冠詞なしで生じるat table, at school, at sea などでは一目瞭然であるが、冠詞等が付いている場合でも同じである。

(7) Mary is at her desk. //There is a man at the counter. //They are at the bus stop.

これらは単に机、店のカウンター、バス停のそばにいるというだけでなく、その場所で物と直接関連した何らかの行動が行われていると解釈される。

(8) Mar is writing at the desk. //A man is working as a cashier. //They are waiting for the bus.

Quirk et al. (1985:676) においても、Ann works at/in a publishing house を例にして、in は物体としての建物を表わし、at はその建物の機能的な側面すなわち仕事内容等を表わすと説明がなされている。

この種のatの用法をLindkvist (1978) は practical connection、Wesche (1986) は intentional concepts、Herskovits (1986) は functional interaction と呼んで他と区別している。この意味でのatがHe went out at the door の at the door にも当てはまると考えていだろうか。つまり、この構文では、出入りするというドアの機能に対して、ある特別な行為が仕向けられているのである。Herskovits (1986:136) によると、at と 出入り口との結びつきの場合 (at the door/gate/entrance/window)、機能的な意味がそれほど強く現れる訳ではないという。それでも、There is a man at the door では単に A man is near the door の意味だけでなく、A man intends to enter the house through the door. の意味で解釈される傾向があると述べている。



以上のように考えてみると、視線移動の場合に at が使えない (4) の例が説明できる。ドアや窓の開口部は、第一義的には、人間や風や光が「通過する」ためのものであって、「見る」行為と直接関わる機能を持っていない。したがって、外を眺めるために窓の機能を持ち出して at the window とすることは難しくなる。Herskovits (1986) が、I saw a woman at the window が A woman is looking outside through the window よりも A woman is sitting near the window. の意味で可能であると述べているのも参考にしたい。前者の「眺める」解釈もないわけではないが、あくまでも pragmatic inference でしか成立し得ないものである。

Herskovits は、[at DET N] で機能的な解釈が成立する場合、N は人工物 (artifact) であること、人物と物との通常の位置関係は in, on でなく next to であること (\*Jill is at her bed.)、物は持ち運び不可であること (\*Jill is at her teapot.)、物の使用法が明確なものであること (\*The art dealer was at the painting.) などの興味ある制限を示している。問題の out at the door が機能的な意味で使用されているとすれば、なぜ \*out at the nose, \*out at the tunnel が容認できないかも説明することができる。すなわち、nose も tunnel は through の関係で、next to の関係を持ちえないし、nose に至ってはそもそも人工物ではないからである。

## 5. まとめ

従来、前置詞句 [out NP] は [out of NP] の of が省略されて生まれる構造だと考えられてきたが、これではなぜ目的語の性質によって of 省略の可能性が異なるのかを説明できないという欠点があった。省略されるのは of ではなく通路を表す at/by/through であるとする主張は有力であるけれども、取りうる動詞と前置詞目的語 NP の範囲が [out NP] と異なることや、有意味な要素としての前置詞を省略しなければならないという点で、この前置詞省略案も採用することはできない。本稿では、[out NP] 構造の目的語がなぜ出入口を表す名詞句に限定されるのかを、漸次的拡張という考え方で説明した。その際重要な働きをするのが、基本構造から導かれ、かつ問題の特殊な構造へと繋がる中間構造の存在である。すなわち副詞的対格の [out NP] が両者の構造を繋ぐ上で、非常に重要な役割を荷っていることを論じた。漸次的拡張によれば、意味が中心となって拡張が促され、構造はその必然的な帰結にすぎないことも分かった。前置詞 out は目的語に極めて特殊な制限を要求するけれども、既に副詞的 out 用法のみの段階でこの制約の中心的部分が含意されており、また out の意味が経路前置詞の意味に酷似しているという条件も働いて、経路前置詞としての out が自然な形で誕生したと言える。

### [注]

(1) OED は初出例から 1875 年まですべてイギリス人作家の用いた例を挙げ、アメリカ人作家の例は 1889 年からである。

- (i) 1889 M.E. WILKINS Far away Melody (1891) 108 Going out the door, he stopped and listened a minute.

しかし、アメリカ人作家による実例は更に古い年代から観察できる。ミシガン大学が所蔵する1705年から現代までの3万冊以上に上る書籍をデジタル化したDigital General Collectionを検索した結果、最も早い時期の例として1850年代初期の用例が数例観察された。

- (i) Looking out the window, I saw the people rushing by with goods in their hands. (B. Taylor, *Views a-foot*, 1850)
- (ii) Soon after his departure a British party arrived, turned his wife and family out the door, and burnt his house and everything in it. (R. Sears, *The pictorial history of the American revolution*, 1850)
- (iii) “How is your mother, Bucchus?” said Mr. Weston, looking out the window. (M.H. Eastman, *Aunt Phillis’s Cabin*, 1852)
- (iv) Tom came out the door. (H.B. Stowe, *Uncle Tom’s Cabin*, 1852)

(2) OEDは、out Westの初出例として1835年の名詞用法を挙げ、1848年、1857年、1887年と名詞用法を続け、その間の副詞用法と思しきものは一例しか挙げていない。しかし、同時代に既に次のような副詞用法も確認できることを指摘しておきたい。

- (i) One day, about six months after we was *first* married, I had a powerful big bore to fix for a feller going West. (DGC, *The new purchase by R. Carlton*, 1855)
- (ii) The latter (of whom I have seen a good deal, both here and elsewhere out West) have a great dislike of Germans, who will underbid them entirely. (DGC, *A visit to Salt Lake by W. Chandless*, 1857)

(3) 前置詞inを挿入すると、より自然な文になる。

- (i) You can walk through that tunnel and come out in the other side.

(4) 前置詞at/byの場合でも、前置詞inを用いて入り口から中に入るという意味を持たせることが可能である。しかし、米語母語話者によると、やや古めかしい表現で、現在では余り用いられないようである。

- (i) At this moment Mr. Boldwood came in at the gate, and crossed the green to Bathsheba at the window. (Thomas Hardy, *Far From the Madding Crowd*) // And it was so light too, the sun shining in at the window. (H. Merville, *Moby Dick*)
- (ii) Bearwarden went in by the stage entrance. (John Astor, *A Journey in Other Worlds*) // Let me in by the kitchen door. (Emily Bronte, *Wuthering Heights*)

ところで、前置詞inの場合、outと意味が逆になるだけで、その他はまったく同じだと思われがちであるが、用例を調べるとそうではない。[in NP]の場合、outと違って、共起できる名詞はほぼ出入りに制限されている。

- (i) John walked in the door. // \*Santa came in the chimney. // \*John walked in the road. “John came in along

the road.”

これは目的語に現れる物体の機能と前置詞 in の意味とが矛盾するためではないかと考えられる。ドアや窓は「出る」機能と「入る」機能の両方を持つのに対して、煙突は出口から物を排出するためのものであり、道路もそこを通過して何処かに辿り付くためのものである。

## REFERENCES

- Estling, Maria. 1999. Going out (of) the window? *English Today* 59, 15-3, 22-27.
- Herskovits, Annette. 1986. *Language and spatial cognition: an interdisciplinary study of the prepositions in English*. Cambridge Univ. Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Univ. of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.
- Lindkvist, Karl-Gunnar. 1978. AT versus ON, IN, BY: on the early history of spatial AT and certain primary ideas distinguishing AT from ON, IN, BY. Stockholm.
- Lindner, Susan. 1982. *A lexico-semantic analysis of English verb particle constructions with over and up*. Indiana University Linguistics Club.
- Lindstromberg, Seth. 1998. *English prepositions explained*. John Benjamins.
- 西川正身. 1949. 前置詞 “out” について. 『英語青年』Vol. XCV.-No.12, 2-4.
- 尾上政次. 1953. 『アメリカ語法の研究』研究社.
- \_\_\_\_\_. 1957. 『現代米語文法』(『現代英文法講座』第8巻) 研究社.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 鈴木 猛. 1985. 前置詞としての out. 『英語教育』1985年10月号68-70, 11月号70-72.
- 鳥居次好. 1954. 出入口を表す前置詞. 『英語青年』Vol. CV.-No.6, 306-307.
- Wesche, Bright. 1986. At ease with “at”. *Journal of Semantics* 5, 385-398.